礼拝説教（2026 年 2 月 22 日）

説教者：中村信哉

# 一番すぐれているもの

コリント人への手紙第一 13 章 1-13 節

**はじめに**

今日のコリント人への手紙第一の 13 章でパウロは、それぞれが自分の賜物を生かす上で大切なことを教えています。それは、「愛を追い求めること」です。イエス様は、私たち一人一人に違った賜物を与えてくださっています。しかしイエス様は、すべてのクリスチャンに「愛を持つこと」、「愛の人になること」を求めているのです。

**1. 御霊の賜物は、愛がなければ役に立たない**

1-3 節でパウロは、どんなに賜物が豊かであっても、愛がなければ何の意味もない、何の役にも立たないと言っています。たとえ異言で話せても、です。異言は、人には理解できない言葉で神様に祈るものです。コリント教会では、異言で祈ることこそ、信仰が深い証拠だと考える人たちがいたようです。そしてそれらの人は、異言で祈らない人を、信仰の未熟な人と見下していたのです。パウロは、どんなに熱心に祈る人でも、愛がなかったから意味がないと言うのです。どんなに熱心に祈る人でも、他の人を見下しているなら、その人の祈りはうるさい騒音でしかないと言うのです。

またパウロは、預言や聖書の知識を持っていても、熱い信仰を持っていても、愛がなければ何の値打ちもないと言います。預言とは、神様の言葉を預かることです。今で言う「説教」と言っても良いかもしれません。どんなに良い説教をしても、どんなに深い神学的知識を持っていても、愛がなければその説教も神学的知識も、何の値打ちもないと言うのです。

またパウロは、自分の財産のすべてを誰かの必要のために献金したとしても、自分のいのちを捨てて殉教したとしても、愛がなければ役に立たないと言います。自分の財産のすべてを誰かのために献げること自体が愛のように思えますが、パウロはたとえ財産のすべてを誰かのために献げても、愛がないということがあり得ると言うのです。つまり「愛のない愛」というのがあり得るのだと言うのです。また殉教こそ、究極の信仰のように思えますが、愛のない殉教、殉教を意味のないものにしてしまうものがあると言うのです。

パウロはここで、愛こそがすべての賜物を意味あるものとし、愛こそがすべての賜物を生かすものであると教えているのです。「御霊の賜物」は、一人一人違うものが与えられています。しかし愛は、「御霊の実」であり、すべてのクリスチャンが追い求めるべきものなのです。ガラテヤ５：22-23 には、「御霊の実」についてこのように言われています。**「御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です」**。愛は、御霊の実の第一に挙げられているものです。

私たちは、「御霊の賜物」を追い求めることも大切なことですが、それよりも大切なことは、自分自身のうちに「御霊の実」を結ぶことです。能力や才能を伸ばすことも大切ですが、自分自身の人格を成長させること、品性を磨くことが大切なのです。熱心に祈り、聖書の知識を蓄え、良い説教をし、熱い信仰を持ち、人に寄り添って助け、熱心に献身することも大切ですが、何よりも大切なことは愛の人になることなのです。何をするかよりも、どんな人になるかが大切なのです。私たちが、愛において成長していけば、どんな賜物も生かされるようになるのです。逆に言えば、どんな良い賜物も、愛がなければ死んでしまうのです。独りよがりな賜物の生かし方ではなく、愛に基づいた賜物の生かし方が大切なのです。

**2. 愛の性質**

では愛とは何でしょうか？4-7 節には、愛の性質について書かれています。**「愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、不正を喜ばずに真理を喜びます。すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます」**。

ここには、愛とはどんなものかが、あらゆる言葉で書かれています。愛とは、なかなか一言では言い表せないものです。「愛は～である」と言うだけでなく、「愛は～ではない」とも言われています。むしろ「愛は～ではない」という言い方のほうが多いです。

よく言われることですが、ここの「愛」という部分に、自分の名前を入れて読むと、自分には愛があるかないかが分かると言われます。例えば私であれば、「中村信哉は寛容であり、中村信哉は親切です。また人をねたみません。中村信哉は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、不正を喜ばずに真理を喜びます。すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます」。自分の名前を入れてわかることは、自分にはいかに愛がないかということです。

愛は、神様が私たちに求めている中心的な事柄です。神様が私たちに与えた律法の中心は、二つのことです。それは、①神様を愛すること、②隣人を愛すること、です。聖書では、神様の律法を破ることを「罪」と呼びますが、その意味では「愛」がないことを「罪」と呼んでいるのです。

自分の名前を入れて読んでみて、もし自分には愛がないと感じるのだとすれば、それこそが私たちの罪であり、私たちは罪人であることが分かるのです。

またもう一つ言われることですが、ここに自分の名前ではなく、イエス様の名前を入れて読むと、イエス様についてよく分かると言われます。例えば、「イエス様は寛容であり、イエス様は親切です。また人をねたみません。イエス様は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、不正を喜ばずに真理を喜びます。すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます」。

Ⅰヨハネ４：16 に**「神は愛です」**とあるように、イエス様こそ「愛の方」です。私たちに

は愛はありません。生まれながらに罪の性質を持つ私たちがどんなに努力しても、愛の人にはなれないのです。同じⅠヨハネ ４：７ には、**「愛は神から出ているのです」**とあります。愛は、私たち人間の内側から出てくるものではありません。神様から、イエス様から出てくるものなのです。イエス様を信じ、神様と和解し、神様との交わりの中から私たちのうちに注がれていくものなのです。イエス様と神様から遣わされた聖霊が私たちのうちに住んでくださる時、私たちのうちに愛が造り出されていくのです。

しかし私たちクリスチャンは、自然と愛の人になるのではありません。愛の葛藤を繰り返しながら愛の人へと変えられていくのです。赦せない人に出会い、自分の弱さや貧しさに直面し、それでも赦し、信じ、忍耐していく中で、愛の人へと変えられていくのです。現実の人間関係の中で、愛の葛藤を経験し、それでも御言葉と聖霊に励まされながら、また祈りながら、少しずつ変えられていくのです。愛は、聖霊が私たちのうちに造り出してくださるものですが、それは同時に、私たちが現実の人間関係の中で追い求めていくものなのです。

**3. 愛は決して絶えることがない**

愛こそが、私たちクリスチャンが能力や才能、賜物やあらゆる奉仕よりも追い求めなければならないものです。なぜなら８節にあるように、**「愛は決して絶えることがない」**からです。また 13 節にあるように、**「いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です」**とあるからです。

８節に**「預言の賜物ならばすたれます。異言ならばやみます。知識ならばすたれます」**とあるように、御霊の賜物は、イエス様が再び来られる時にすたれるのです。預言や異言や知識は、イエス様が再び来られるまでの間に、教会に与えられた賜物なのです。私たちの説教も神学的知識も、一部分でしかないのです。私たちは決してすべてを知っているわけではないのです。どんなに良い説教も、神様の御心の一部分しか語れていないし、どんなに深い神学的知識も、神様の御心についての一部分を知ったに過ぎないのです。

12 節に、**「今、私は一部分しか知りませんが、その時には、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることになります」**とあるように、私たちはイエス様が再び来られる時に、イエス様と顔と顔を合わせて、完全に知るようになるのです。

私たちは、すべてを知っているから救われているのではないのです。一部分しか知らなくても救われるのです。救いに必要なわずかなことを知れば、それで救われるのです。私たちはすべてを知ってから救われようとします。しかしたとえ聖書についてすべて学んでも、それは一部分でしかないのです。私たちが救われるために知るべきことは、①主なる神様は創造主であり、②私たちは罪人であり、③イエス様は主なる神様であり、私たちの罪を償うために十字架で死なれた救い主であること、④そのイエス様を信じ、神様に立ち返れば、だれでも救われる、ということです。

私たちが救われるためには、わずかなことを知ればよいのです。なぜなら、神様が私たちのことを完全に知っておられるからです。私たちは神様のことを完全に知らなくても、神様

は私たちのことを完全に知ってくださっています。その神様に、すべてを委ねればよいのです。神様が私たちを救いに導いてくださるのです。

**おわりに**

私たちは、愛こそ追い求めなければなりません。愛は、私たちの賜物を生かすものです。愛があってこそ、私たちの賜物が用いられ生かされるのです。愛は、決して絶えることがなく、いつまでも残る、一番すぐれたものです。能力や才能を磨くことも大切です。祈りも、説教も、神学的知識も、慈善活動も、奉仕も大切なことです。しかしそれらはやがてすたれるものです。愛こそが、すべてを意味あるものとし、いつまでも残るものです。

私たちのうちに愛はありません。愛は神様から出ているものです。イエス様を信じ、神様との交わりを回復する時に、私たちのうちに流れ込んでくるものです。私たちは、自然にまた自動的に愛の人になるわけではありません。現実の人間関係の中で、愛の葛藤を経験し、御言葉と聖霊に励まされて、少しずつ愛の人へと変えられていくのです。今日の聖書箇所にある「愛は～である」「愛は～ではない」という言葉と自分の心を照らして、自分の愛のなさを悲しみ嘆きながら、またイエス様に助けを求めながら、少しずつ変えられていくのです。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちはあなたのことを完全には知りません。しかし、あなたが私たちを完全に知り、私たちを救いに導いてくださったことを感謝します。

今日の御言葉を通して、私たちが追い求めるべきものは、何よりも愛であることを教えられました。御言葉に照らして自分の心を見る時、いかに愛において貧しいかを思い知らされます。それでも私たちが、愛を追い求めることを諦めずにいることができますように。完全な愛を持つイエス様に助けを求めつつ、神様を愛し、目の前にいる人を愛していけるようにしてください。イエス様のように、人を赦し、耐え忍び、信じることができるようにしてください。

この祈りを、私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。